

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 川口裕司



学位申請者： 鎌水 兼貴

学位論文名： 共通語化過程の計量的分析 『方言文法全国地図』を中心として

### 【審査結果】

博士論文審査委員会は、提出された鎌水兼貴氏の学位請求論文を慎重に審査し、最終試験（公開審査）を行った結果、全員一致で学位申請者に対して博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。

### 【論文の概要】

審査対象論文は、第1部、第2部、第3部の3部で構成される。以下に論文の概要を記す。

#### 第1部 共通語化研究の視点

第1部では研究の位置づけが示されている。まず鎌水氏は共通語と標準語という用語の歴史的変遷と定義について論じる。さらに論文の中で言及される「新方言」や「東京語」等の概念規定も考察した。その上で本稿が分析対象とする「共通語」について、国立国語研究所の定義を採用しつつ、具体的な分析作業においては、方言地図の見出し語として記載された言語形を共通語形と見なした。続いてこれまで方言地図を用いて行われてきた様々な計量的研究を紹介し、方言データベースの意義を説明している。とくに『日本言語地図(以下 LAJ と略)』についての先行研究に多数のページを費やし、本稿における計量的分析の雛型とも言うべき、井上史雄氏による方言地図の因子分析、語形の初出年代による共通語の分布範囲の確定、人口データや鉄道距離に基づく重心グラフを用いた分析等、様々な分析方法を駆使した計量的分析を検証し、大規模な方言データベースの計量的研究の意義を強調する。

#### 第2部 『方言文法全国地図（以下 GAJ と略）』の共通語化に関する分析

第2部では本論文の中核を成す GAJ における共通語化の構造について分析が行われた。GAJ の話者は 1911 年ごろに生まれた人々である。鎌水氏は GAJ に見られる共通語形を分析することで、共通語化の幾つかの段階を解明することができると考えた。

まず第4章で、GAJ のデータについて解説し、データの単純集計を行い、その結果を報告する。単純集計からは予想通りの結果が得られた。すなわち関東を中心として共通語形の使用率が高く、東北・九州において低いことが明らかになった。鎌水氏は計量的分析を

行うにあたって GAJ のデータを大きく 2 つに分類する。GAJ の第 1 集は助詞のような無変化形を、第 2 集と第 3 集は活用形を扱っている。これらの助詞項目と活用形項目を集計したところ、助詞は活用形にくらべて共通語化が進行しており、共通語の使用率に大きな差があった。このため氏は事前に両者を分離して解析することで、共通語化の過程をより詳細に分析できると考えたのである。

第 5 章で、助詞項目について数量化 3 類による分析を行った。分析からは、関東と関西の間に明確な違いがなく、非共通語地域として琉球、東北、九州地方が抽出された。助詞は基礎的な要素であるため、長い時代にわたって無変化で、本州中央部に共通語形が広く分布すると考えられる。鎌水氏はこの分析結果を京都を中心とする共通語化が関東にも広く及んでいる状態を表していると解釈する。

第 6 章では、動詞や助動詞からなる活用形項目について同様の計量的分析を行った。分析からは、関東中心、関西中心、周圈的な分布という 3 つの異なる構造が抽出できた。また関東だけで使用される語形は全国的に用いられておらず、共通語が形成される際に関西方言が大きな影響を与えていることが分かった。

第 7 章では、共通語と他の語形の関係性をさらに詳細に研究するために、共通語形と非共通語形の類似性を計量的に分析した。類似度を測る距離計算法として鎌水氏は、パターンマッチングの手法であるレーベンシュタイン距離を採用し、生成音韻論における弁別素性表を数値化し、音声間の相関係数を求め、共通語と非共通語形の距離を計算し、GAJ の第 1 集から第 3 集のデータにクラスター分析を適用した。結果は第 1 集の助詞項目では周圈的な分布が、第 2 集と第 3 集の活用形項目では東西対立がみられた。

第 7 章の結果は第 5 章と第 6 章のそれを再確認するものであった。共通語化においては関西方言の影響だけでなく、関東方言、とくに東京中心の言語伝播がどのようなものであったかという点が注目される。そのため第 8 章では、「鉄道距離」という指標を用いて、共通語化だけでなく、東京方言と京都方言がどれほど伝播しているかを分析した。東京 23 区の 2 つの回答を「東京語」、京都市、高槻市、大阪市の 3 つの回答を「京阪語」と見なし、それらの語形との一致率を計算した。結果として京阪語が広範囲に分布しているのに対して、東京語の分布は関東周辺に限定されていることが示された。

第 5 章から第 8 章までの計量的分析は、1920 年代までの日本語の共通語化の諸段階を表していると仮定される。まず京都中心の共通語化によって、非共通語地域として琉球、東北、九州という周辺域が現れる。その後、関西から関東にまで及ぶ共通語化は継続するが、近代以降の東京を中心とする共通語化の影響は、関東周辺部に限定的に見られるだけである。つまり京阪語は東京語に影響を与えるものの、東京語は京阪語に影響を与えていない。ただし 1920 年代より後の共通語化については、GAJ のデータで調べることができないため、鎌水氏は GAJ と比較可能な現代の方言データとして、北海道と東北地方の太平洋岸で実施されたグロットグラム調査(以下「TH 調査」と略)の結果を利用する。

### 第3部 東北・北海道地方における方言文法の地理的・年齢的動態

TH調査の項目は、GAJの第1集から第3集の項目と30項目が重複しており、1911年に生まれたGAJの世代を、TH調査を実施した時点で90代の話者と仮定することで、GAJの後に生じた共通語化を連続的な時間の中でとらえようとした。

第9章で上記の30項目について単純集計を行い、いくつかの角度から共通語化を分析した。そこから明確になったのは、共通語化の中心がかつての地域中心都市から、東京自体に移りつつある状況であった。なかでも若年層において東京からの強い影響がみられ、旧藩領に起因する旧来の地域言語の構造は若年層で崩壊しつつあることがわかった。

第10章ではTH調査のデータに数量化3類を適用して、方言形と共通語形の分布パターンを分析した。その結果、第1軸と第2軸に地域差と年齢差がきれいに反映していることが分かり、第3軸からはGAJと異なる新しい方言、いわゆる「新方言」の世代に特徴的な語彙が存在することもわかった。また東北地方における近年の共通語化の傾向として、地域差の減少、方言形の減少、地域独自の変化の衰退、という3つの方向性を指摘することができた。続く第11章では、TH調査をもとにして私的場面においても共通語化が進行するとともに、東京語の普及している状況が観察され、旧来の東北地方の方言体系が共通語と東京語によって侵食されていることが分かった。

鎌水氏は本論文の結論にあたる最終章の中で、GAJおよびTH調査の計量的解析を通して「共通語化過程の5段階モデル」を提示する。氏のモデルは以下のようなものである。

第1段階は江戸時代前期までの状況を表す。この段階については文献によってしか実証できず、本研究から直接的に把握することはできないが、第5章の分析から京都を中心とする共通語化の方向性を抽出することができた。この段階では日本語の中心は京都の中央語のみであったと推定される。第2段階は江戸時代後期から明治初期までである。この段階はGAJの前段階と考えられる。江戸時代中期になり、中枢機能が京都から江戸へ移行した結果、言語の上でも東日本に新たな核が生まれた時期である。第6章の分析で、鎌水氏は関西と関東の2つの中心の存在を指摘する。第3段階は、明治時代から昭和中期までを指す。この時期に東京の山の手の言語と書き言葉を基盤とした「標準語」が形成される。しかしこの標準語はまだ日常言語になることがなく、使用場面は改まった場面だけに限定的に使用されるものであった。第4段階は昭和後期の時期である。テレビ等の普及により共通語化が急速に進展した。鎌水氏は第10章で、TH調査から私的場面においても共通語化が進行し、東京語が普及していると指摘する。そして最後の段階は共通語化がほぼ完了した現在を指す。

#### 【論文の評価】

公開審査は2008年12月25日(木)に東京外国語大学事務棟中会議室において実施された。まず最初に博士論文執筆の目的と概略の説明が20分程度あった。その後、各審査員から質問がなされ、それに対して鎌水氏から回答があった。以下、本論文の全体的な評価に

ついて述べる。

### 1. 問題設定

第1部の第2章で、鎌水氏は日本における言語地図の計量的研究に関する先行研究を広く渉猟し、ネットワーク法、重心グラフ法、クラスター分析、因子分析、数量化3類等の様々な分析手法を用いた諸研究の意義と成果について詳細に論じている。

本論文以前にも LAJ に基づく計量的分析が公にされてきたが、多くの研究は言語地図データの一部だけを対象にしている。これに対して本論文では、GAJ の中で無変化形を扱う第1集と変化形を扱う第2集・第3集のデータが分析の対象になっており、こうした大規模データに対して計量的解析が行なわれるのは、本論文が初めての試みであると言ってよい。また LAJ が方言語彙を扱った言語地図であることから、従来の計量的研究は個々の単語の分布とその歴史に焦点を置いていた。一方、本論文では GAJ が文法項目に特化した言語地図であることから、従来には見られなかった「文法領域における共通語化」を解明することが可能になっており、この点は本論文の独自の視点と言える。以上のように本論文の問題設定は、従来の研究動向に立脚しつつ適切になされている。

### 2. 研究手法

鎌水氏は、日本の言語地図にとどまらず、フランスのパリ周辺部の言語地図データについても、同様の多変量解析を行い各地点の共通語度を計算した。パリ周辺の方言データをクラスター分析し共通語度のグルーピングを行ない、多次元尺度構成法 (MDS) を適用して類似度を二次元空間にマッピングしたところ、ほぼ実際の地理的位置関係と関連づけられる結果が得られた。これら一連の分析は、氏の計量的手法が日本の言語地図だけでなく、海外の言語地図にも応用することができ、かつ有意義な結論に到達できることを証明している。氏がこのパリ周辺部の分析結果を国際会議で発表し、自らの研究手法を海外に向けて発信したことも評価できよう。

第7章では方言形の類似度を測るために、パターンマッチングの手法であるレーベンシュタイン距離を利用して音声間の距離を計算したが、この手法は欧米においても最先端の手法であり、日本の言語地図には初めて適用された。第7章の結論は第5章と第6章の結果を裏付けるものとなっており、氏の仮説がこの新しい手法によって補強されたことになる。言語地図の計量的解析は、コンピュータの発展に呼応するように近年目覚ましい成果をあげつつあり、本論文はその一翼を担う野心的な研究と言える。

### 3. 新しい知見

欧米では1990年代以降、言語地図を多変量的に解析することで、当該言語の歴史的な発展の過程を推定しようとする研究が幾つか行われてきた。日本でも言語地図データを計量的に分析した例は幾つかあったが、本論文のような大規模な言語地図データを対象とした研究は前例がなく、さらに計量的分析を通して共通語化の諸段階を推定しようとする試みは、本論文の独自性を示している。

鎌水氏は、第3部の中で、1911年に生まれた GAJ の世代を TH 調査を行った時点で 90

代の話者と仮定することで、GAJ と TH 調査を連続的な時間の中でとらえ、計量的分析を行うことで、地域差の減少、方言形の減少、地域独自の変化の衰退といった、近年における共通語化の傾向を指摘することができた。2つの異なる方言データを一定の条件の下で経年的データとして処理し、そこから重要な結果を得たことは、同様の分析に新たな方向性を示したと言える。

上述のように、本論文では先行研究の批判的な検討をもとに適切な問題設定を行い、言語地図を先端的な研究手法を用いて分析し、共通語化の過程について新しい知見を提示することができた。

ところで、こうした肯定的な評価以外に、若干ではあるが批判的コメントが委員によって述べられた。たとえば本論文では「共通語」という術語が統一的に用いられている。第1章の中で共通語と標準語の用語上の問題を詳細に議論しているが、必ずしもその定義が明確になっていると思えない箇所があった。また言語地図の分析で「周圏分布」という用語が用いられているが、本来この用語は背景に歴史的な言語事実が明確になっているときに使用されるため、本論文では別の術語を使用したほうが良かった。最後に、参考文献と引用に若干の不統一が見られたため、修正するようにとの意見もあった。上記のコメントは、もちろん本論文の質と水準に直接的にかかわるようなものではない。これらは本論文がさらに優れた研究になるよう、むしろ叱咤激励する意味を込めて述べられたものであった。

最後に審査委員会の最終的な評価について述べる。本学位請求論文は、先行研究の渉獵を行い、妥当な研究手法を用いており、質・量ともに課程博士論文の水準に達しているというのが審査員の一致した見解であった。また公開審査においても、審査委員の質問に対して適切な回答がなされた。鎌水氏の今後の研究の深化と発展に期待しつつ、審査委員会は全員一致で鎌水氏に博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。